



月正不遇

嵐山集

六



嵐山集卷第六

其部

百合草

目ふみぬ鬼ゆりもれやまの
花の影ありきや鬼はこひゆり
とくぬまや心はくしの博多ゆり
鬼ゆりれさぬいあやうらせん
咲わらなぐさたぐらゆりれ
花のほろややつきお姫ゆり



風



此山集卷第六

其部

百合草

目ふみぬ鬼ゆりもれやまの
花の形ありきや鬼はひの
とくぬまや心はくの博多ゆり
鬼ゆりれさぬいあやうらせん
咲わらなうさうたうゆりれ
花のは露やうつきお姫ゆり



夕方の陰もよそん車ゆり
 鬼百合花のまよきや遊生門
 みよのまよ引てゆらん車ゆり
 面も親うたつははちゆり花
 花の端ハ梨母さげ車百合
 引てまよか根や背去れ車百合
 まより花母させしや牛車百合
 さく花のまよわつ流車ゆり

夜 令中
 夕翁
 大夜翁
 正勝
 貞三
 夜翁
 定房

泣く人あ極あや井之の陣
 折きてう人やも持のう梨ま百合
 勢蹕り咲おなじら車百合

留 貞則
 翁 貞紀
 山翁 重佳

車轉の坊とて
 三つわもよそるれ坊の車ゆり
 まよ百合まよき車ゆり
 鬼百合らら川らめら目費
 鬼百合の角とみらわら蒼うか

友 左尉
 夜翁 如貞
 夜翁 梅勝
 夜翁 盛者

絶世のふれや京毛の車百合
ちうすおよせらふしくゆきむ
姫百合ハたはのら菊の姉子
こほきある落や本常殿車百
ひ光垂て終日みらん小姫百合

美人車

たぐのこききしやるら美人車
あま枕る人こみくらや美人車

つよふらん母花はら折ら美人車
恋草とらふるき物や美人車
携らきしぬ施の好色は美人車
螢火とみくらやあつら美人車
花と虞氏落ハ泪の美人車
小野小咲ハ小町の折の美人車
乃てらん虎外野人も美人車
恋もてふやれこもしらぬ美人車

六上り

山
うた

花の香は友魂香の美人草
 花影は玉はうらや美人草
 花は中てや美人草
 美人草を花は落ていぬ女
 細とぬ花は賢女美人草
 救嘆は三子人の美人草
 花はあやうな花の美人草
 花は花をわらうやうな花

哲 保友
 宋 良勝
 讚 台成
 記列 正成
 松 一治
 侯 貞飛
 吉 伝元
 夜 近き

美人草はるしく花のこころ
 花のよよひのかけ花は美人草
 美人草はるしく花のこころ
 花のよよひのかけ花は美人草
 美人草はるしく花のこころ
 花のよよひのかけ花は美人草

高 季英
 高 海行
 春 貞利
 高 一室
 高 一室

花子花

花の香は友魂香の美人草
 花影は玉はうらや美人草
 花は中てや美人草
 美人草を花は落ていぬ女
 細とぬ花は賢女美人草
 救嘆は三子人の美人草
 花はあやうな花の美人草
 花は花をわらうやうな花

哲 保友
 宋 良勝
 讚 台成
 記列 正成
 松 一治
 侯 貞飛
 吉 伝元
 夜 近き

落家花のつらもの光けし
場立 京
平和 吉右
咲きまわりの切のすけのむ
良次

瞿麦

るそこの虎と射る矢の心
おはしこの花をさるちりけ
るそこのやこま縁さる秋の
梅子とそこのつら露のちくさ
るそこのつらこのこまやぶれ竹

なほしこそそなたのあはれ
梅子のまわりは鈴の露の玉
るそこの河魚院のうぶる
梅子此生園のうぶ大和邦
るほしこそあはれこの女
おそこのあまのうぶの鬼子
梅子のひき草すくせられた
るほしこそあはれこの病氣か
葉 芳昌
齋 友宣
大後師 正勝
春 貞好
余 良勝
勢 成方

なすーのまうまや竹の筒ま
かり 糸 廣 吹白
 花のけきうくう名は長
 る長し此つなうは長き乳房
 ありーの乳房よりーの乳房
 同 長頸

石竹

藍山母そそそ見えぬ石の竹
 さく花の色そは紫り此竹
 る母おひくうる名石の竹の筒
廣 嶺 草 葉

志存せいの気やせきちり此花
 今の人と被せまうく此花竹
 候はや約束しきうーの竹
 氣の毒やしきう竹の子程取
 かせと制札こー石竹
 おませく火をちるも出る石竹
 石竹のちりしく花やる
 花の細うく石竹や石乃おひ
廣 友

石の竹乃つふまじきふら玉置の
 花や木葉其まじきふら玉置の
 さうりぬい推まじき目付の掃
 石所と飛ぶまじきふら子まじか
 石の竹やすこふ月の花まじり
 おまじき枝と抑りこれ石の竹
 まりり花の露を葉まじき石の
 まじきふらこけの海路まじき竹
 彦好 貞良 余 尚 岸
 友之 元親 長親 将長 女貞

咲つゝま花や其まじき竹の玉
 まりらまじき竹つれ石の竹
 石をみよ大石竹のもて河まじ
 收考てまじきわせまじき竹の
 さうりぬい恋のま荷まじき竹
 んちをまじきまじき竹
 碑の踏り堂のまじき竹
 折るまじきまじき竹の玉置
 貞好 貞良 余 尚 岸
 友之 元親 長親 将長 女貞

筆のちくせせとわぬ方ふは
みとれとや人もめさる此の竹
あみ開きみるわと母のあせ
羽衣て極く厚くまかふ竹
ふの竹や河原野雀表はするあ
常夏
同

弁
宝合

牛
安持

元信

長隆

とさるんのもくくやたし庭の橋
白時のもくく庭のあそく花の
常夏
之親
長秋

三
之親

井
長秋

とさるんのもくくやたし庭の橋
白時のもくく庭のあそく花の
常夏
之親
長秋

森

当心

七
七

夕顔

夕顔の花をさく人のたむけ
にそくれあ咲り白やれそき花
夕顔の汗の垣の花は露
夕顔やよろこふ露乃あろ
夕顔もまをひさむる日影

良春

夕貝の花や徳氏のまこしを
 白帆とみたり夕貝はるる自らの
 夕貝のまこしは^志あまのこのおけい
 夕貝のまこしは^{坂口}折やうり^衆
 夕貝の能あまのこ^{信田}うり^衆
 夕貝の花やまのけい^{信田}くは
 梅うんもけい出るや約の里
 夕貝をみるめ^{信田}くは酒振部
 信英 周次 政信 中島 政重 信元

浮あまのひくまよふんのもも
 夕貝や風のおまもまよふん
 夕貝のまよふんは^集まよふん
 九 清成 一夢

風仙花

折帆とみたり夕貝はるる自らの
 花の貝あまのこ^集は^集まよふん
 定重

鉄線花

夕のあまのこ^集は^集まよふん
 集

吹阿のそ風のそまりの鉄線花
有葉のてまわくまれ也鉄線花
あつ絲乃ちあま出る也鉄線花
しらまきつらつあや絲乃鉄線花
そら繁のたのこまり鉄線花
さげのそ可置つちや鉄線花
ほつちよといもうまの鉄線花
花とすう虫の磁の鉄線花

新川 玄徳
江 未得
新海 勝左
吉野 玄徳
中 忠孝

ゆらゆらやまふお計の鉄線花

新田

友直

鉄線花とらんもゆらき

さげ

おとさんふくそま鉄線花

新谷

貞利

鉄線花痛みらつらわうか

此

夏草

とらふとらふ花のけいふん
のそまや似そまんの花の色

花もさきりひく遠慮はんい
うらな草中まう別也夫若
女房は智恵や赤福くらのみさき
夏瘦とせぬいよるれ子は外
中へさびき草は志くらり我
親もさきれ若日るらんまの子
縁物もほくくら親のわをい草
夏苗い志りおつとぬち香の

大
全

暑氣をやとふ長刀香薷の
まくほい馬よや若れまかん
涼草の院もやとんすの草
たまぬやじよさりの花塚
刈藁の青道ふの夏野か
志也の葉と似て抱むあつ飛
場ちしり夏草みよまお花
をゆてみよまふしのむ盛

大正十一年

坊やわや花を早にやうしひ
 多んやわ夏にたのきも教
 咲は西露のせつらる道徳
 毒とて佛や濁りしやらのむ
 目の括を出さんくはあやま
 志ろ露のひもあやま銀要
 枝志り丁百もさけ金鏡を
 實も目のおくつさぬ金銀を

坂倉 政辰
伊波 心実
任後 一葉
道生寺 一舟
桑 一歩
坊 孝尚
 善次

将基さうしん子のみき金銀を
 八重垣の夏に拙くまやも
 ちん庭ふ一なるる金銀を
 十お丹さるる金の七重花
 舟より道徳もかんたや枝松
 後夜おののめ共さや花の書
 枝葉やあやまや昔は茶園
 夏まるまげらのうちるる茶

長久 正友
井上 西知
葉必 一方
池田 一舟
江 林麻
戸 由河
戸 康耳
 未始

夏とくも秋まきみなりと根とひか
 わさるゆいぬめしれ葉の利根原
 山の腰めさるる花のうらな
 矢へして根をひきめたり
 花の顔そ赤き珠皮うつほな
 ぬめおしぬぬそむきよら
 やこころも花もさるる
 夏の水み浮てもぬめむじう定
 中 永吉 順正 矢野 國村 霧 正岡 海勝

池の魚いゝ水草の花籠か
 後ら藤いゝれえ八のわさ
 とげしも夏いゝもさるる葉
 あるたて摘あつてさるる
 花の名いゝ山海めさけと野菊
 水鷄
 七種めあつてたがくぬ
 料理あつて誰かぬぬのたけ
 井上 正知 長頸丸

くらまゝあまのけりあま
 川波のこゝに橋のくわあ
 河入たつらあまあま
 けりあまのあまあま
 出雲路あまの氷籠の神子
 氷は切るとあまの川門
 僧もたつ月のつ田にあま
 家毎にまらあまあま

保友
三前音
気廣
順理
森
蟹秋

あまあまのあまあま
 けりあまのあまあま
 面あまのあまあま
 けりあまのあまあま

花
後座
了寺
夕辭
法あ
あ存
也歌

物約

あまあまのあまあま
 けりあまのあまあま
 物約のあまあま

去夜
当心

TEXT

寺ヶ池人移まつらひとる日友三
 うのち池大あまゆらひけめわ長龍
 うしとれ時のまらひ移る同
 似たりそかすはうあま人
 やき點を移のうまおれ引
 かり大も移ううひらたの地獄の
 點
 すらひら點も何されちう引

あいふまもかき葉池のあま引
 ましくらもをる移や池引
 おらむらるも早れ河の點
 點そのほらうひさくら引
 わさるそ者め點やひき引
 夏河へ足こりゆとあゆ引
 川舟をちりまゆらう池の點引
 あひみ點をとりり一河のる引
松 一治
余 良勝
 定重

破きくやあがり出ら鮎の網 森 英茂

すくひ網やうきめふ鮎の海川 中崎 貞宣

鮎つらやすくちばはくさくさ此針 あ部

柄りやもせよる川の鮎のき 会須

わらう人鮎と海をさすを

糸りひき

とふわいの葉をのせてわら 長松

海松

志望は海のかもみ字母のふら 余 宗判

る母毛のこえさごとく今 聖山 長川

あは申すかりとさき 海人の鮎 長親丸

あは竹

竹の子はせとさ親のめらと成

さうつらうちあはけれ子た外

暑さよや脱さげれあつと木

竹の子お鳥せさすを教は

竹の子はうぬすめきぬ竹生湯
やま教を竹の子くらむつとり
夏がーのゆくら竹の子たけ
竹乃子地をまぬも教ちる
良業りぬの竹あうちり此面
少わまど中よま竹の子たけ
むく子にさうふゆその竹
生湯はのよまま竹乃子たけ

よあひのむん他ぬ竹の子たけ
ゆまゆ竹乃子たけ教のゆ
竹垣のよまゆらもあまな
志る竹の子たけよんう家
竹自を天へまそけ今年生
人乃此移くるま竹の子たけ
新をふくられ竹乃此教り
あ竹や十七八く教ちる

親竹の子を思ふ比や昔月を
 へふくせさけものあり子孫
 乃竹乃竹梅也朝のつま
 まりのたけのひかりは年
 よかりとを人の竹るり子孫
 竹田るり竹の休身ありと子
 るるつたまこ子わん志の
 日をすく子孫教竹の

盗人のつくらすのこり今年
 す此子の中よりあるをよき
 竹の子小物ちかきそ筒ぬり
 教乃内母そりあり竹の子孫
 教乃とて者も竹乃子孫
 ひもありて子有そふ子好
 竹乃子孫みよや教乃かま
 親竹を子をおとありふ

其 言成
 森 倉成
 森 酒永
 上 保也
 由河
 夕翁
 竹大

竹乃子よるもせむらふ手名 竹
 竹の子や弟の本とくまた繁 竹乃子
 燦めらへ海鳥れとけの初同 竹乃子
 すくをのぬくまよ竹乃子原 竹乃子
 男もき竹乃子原 竹乃子
 竹の子とそとそと落也原 竹乃子
 久久くそとそと竹乃子原 竹乃子
 竹乃子とそとそと竹乃子原 竹乃子

ありあふ竹の志あり男女定重 竹
 竹の子はまるとそとそと正勝 竹
 そとそとまると竹のよ良保 竹
 庭おれ竹をさ竹乃子元晴 竹
 すい物より物とそと未云 竹
 思ひませらるる竹の子や未云 竹
 竹の子れす未云 竹
 竹乃子れま事なる竹の食未云 竹

竹乃子

穉多有てかたやく竹の子持中 清之
 めう竹の号まきとくくや中 永吉
 竹乃子やいふ竹を此馬の角中 正忠
 婿竹よむらり子持中 忠次
 竹の子はきりかし衣や丸中 芳昌
 ふむおいたる竹の寄子中 有信
 二まこみてらる竹乃中 保友
 なるさゆもうむ川竹中 政原

あかりんちりや婿竹の虫倉 正岡
 人を只竹の子とく倉 指保

桑野志りく倉

おつらちもわらじ倉 貞利
 そそそあけよたさけ倉 丸
 川の夏も子持倉 月
 余の海へゆるい倉 子
 子とまてる倉 女竹を倉

大正一

竹の子の種民将来の爲に五
 竹乃子也矣ちくくたのかんり
 ぬふつるへんれつと竹乃子也
 竹の子あこーせさずかまは秋
 子のあかこよふあまもれ竹の
 竹の子へきえ生らるやかこりも
 端午付 菖蒲粽
 あきそむるや竹のくしあやあ
 〃 〃 〃 〃 〃

斬みさす 菖蒲刀のきりこり
 菖蒲ともあまきこらすか
 菖蒲刀短きと斬みさす
 ちんちんりりやんこ
 ちんちんけの子あたる
 斬の業やがるあやの
 斬乃書も菖蒲刀やこ
 ちんちんはあまの菖蒲

ちんちん

波の故うつゝむらや花菖蒲

ゆけい路の玉ちり菖蒲刀爪

右と清や白の菖蒲まは

まきなみれかりと秋ふ節竹

月も回るといほの昔竹爪

昔竹とえまらや穉も菖蒲草

菖蒲少くやあま川よ秋のゆめ

ふくやあめ尾の鬼杖流り繁

林深

あ勢

良勝

正伯

乃節

尋ふく樹下ふ菖蒲の柳爪

我家中よりまらあやあや秋の

引糸女の菖蒲や秋あふ

秋のそおもひつゝあめ秋

形あふくもとめと水多は菖蒲

極とつらや菖蒲刀秋のとお

菖蒲刀あふ磨もあそれのき

菖蒲刀いとすああや秋杖

昌体

友宅

乃牙

西佐

貞利

玩表

如貝

定房

葛蒲少く折の腕木や刀ヶ
糸株母おさめん葛蒲刀ふ
葛蒲刀ふんぬきさくや冠
葛蒲刀ふんぬきさくや冠
おと人住れ葛蒲法くら此方
葛蒲刀ふんぬきさくや冠
折の葉もさくしふよ葛蒲
衣ちうてさくしふよ葛蒲

中臨 貞宣
平柄 良次
赤岩 季貞
畠 玄祇
中臨 貞宣
三橋 定次
井上 正知
八木 長次
平柄 貞次
糸 貞次
中臨 貞宣
赤岩 季貞
畠 玄祇
中臨 貞宣
三橋 定次
井上 正知

お徳あす入かともある葛蒲
わあひくさくさくおんおの手書
折折もやあつさくれつ葛蒲酒
葛蒲酒やさかすら造る文字の
石さくおん地いされおお井
おえさくおて領の波むく標
有りむくまをりかさわちま
我せこつふおおおお

中臨 貞宣
平柄 良次
赤岩 季貞
畠 玄祇
中臨 貞宣
三橋 定次
井上 正知

屈原やまゝ海のあり終
日
 葛蒲うき旅六軒はたきまに
蓄
 のちまさな旅六軒は葛蒲に
友重
 繁島の新乃葛蒲も富は
改次
 軒は下舟もあつて葛蒲
長調花
 けさ白ふ軒は葛蒲やいぬあ
 水あつて葛蒲刀やけさのあ
 惟とくゝのあぬい内裏終

経ぬぬくくくをせんく終
終

ろら申けの増とわけら終
終
 せふたけいゝるあも京あ
 へへへいありまけ髪打いゝ
 駒引てさぬいあゝさうへ
 るんもいさくもめて足らへ
 正朝

龍の駒をけいんらた是は
不盈
 総もくくひつともあひり
中嶋 利重
 明林のは国あつらけい
京 貞定
 もとや子あつらせとまを
左衛門 良知
 らもく飛けいもや鴨の一
友定
 日やもみ字こくあぬ競馬
平橋 徳成
 すたはあつらけいもく
竹中 良次
 ををあつらせよしあきま
心作

つらうてあはしこのわ
丸
 らもあひのけいもく
二
 めあひつらあきま
二

五月雨付梅ぬ

笠おとさつまのこぬこ
 五月雨や山をた尾の
 六月雨の高瀬刀は
 五月雨や海行とるす
 小藤代

み月毎ハ多此出花のこころ式
伴檀の上らるるやさめこれ
五月毎北らうらく日也只一夜
六月毎や下客へらも定此海
七月毎のや月日のおき年
八月毎乃や此きもや古曆
九月毎や子蘭のともむ木の根
十月毎あらうみ月毎たやこも

梅の由也さやもいれし神あり
竹乃子よも葉のむじ人のも
あきつゆものむじとらうや梅の
唯よよぬいをい白くむじ人此由
梅の由とあらするややた塵粒
六月毎の家也とをせぬやこ
五月毎やも回んまの古新
四月毎やこつ竹の旅乃定

了書
久保
良か
貞利

六上りた

五月廿八日の眠れ目見 子音 久保

五月廿九日の管のひてり成 大岸 如貞

目やこれ地新井雨宿り志

けつみ書て星出けまの

星出はさうきや目や地新 高 宗利

人古よりうの目や 堂池田 一力

五月廿六日の五糸へ死り

て人にあこれ作のたて

秋のたあうーあ糸のさん 右右 貞好

あうーうう

う合わかさほへさみ 平尾 華心

蛇もれやうの遊れらん 井上 正知

あつあみ 了あ 久保

定ふ 水 清城

さ 山 定色

は 山 安之

五月の雨のつゆもけり 日在園

室 乃友

五月の雨やあまのすけの雨

若次

北野神社の雨

中略 貞宣

天祥や龍王とぬる梅の雨

郡山 威実

浮々々々や日在天祥の梅の雨

井上 正知

花の笠夏まていさよ木の雨

若谷 貞利

枝もや一味のふり毒乃の雨

井上 正知

志のつとま浮々々や花梅の雨

正知

天祥のつとまふくうらや梅の雨

上村 重負

梅の雨まうらや雷や星々々

池田 政次

天祥乃神木をぬるやむれ此の雨

池田 一明

梅乃の雨すいゆらされあがり此

大津 一乃

雨と日の嵐乃穴やむれ此の雨

津 如貞

天々々や地へ花梅の雨此の雨

一系

梅乃の雨まうらや好交木履の雨

正知

日此の雨あまの梅乃の雨

集次

梅乃の雨

庭をよりより流んといふ梅の雨 上 五年

五月雨の大海あるや井の榎 長流

陰陽もとれぬやあぬさん と 同

早し女つとまてんつとや破建の笠 と

五月雨は水ぬぐや東山はお と

五月雨の流る人あそび と

梅の匂やあそび と

河舟もく と

梅乃面や出づ川波の花は親 と

梅の雨は と

本花の匂や と

か と

梅

くらつらば と

梅の本陰ての と

の と

存好と名めさら花のよけ
 かうおの坊をらりつらの物
 二侯ハ花をらりて風乃とらえ
 橋の家風いじりてつるさ
 さら花のきくやらやれとよ
 橋やじりて人の神香好
 むしく橋や伊勢物治
 めめさしてみるや琴をよむ

高 菊別
了善 左之
唐 定序
聖明 立村

小橋を流白くはあめのらり
 ちあさらつらと

壺

中めさら流さき花の白糸
 橋やさらりかりもんきき風雲
 花科子咲やお家此清水の庭
 かうあともめさつらあめ白糸
 さらりてれをせよぬけ物
 心あめ命もたらりつらあめ

郡山 白式
伊友 白笑
松山 玄和
 長瀬

門と世をみろや明しは花威
夏の日はひさしくや咲かす
ゆくもみさうらゐのむい
そら花ふらゐるものも
まよひ

標

咲白ふ普天のふれあらし

施子

まのこり比ぬもはるは花威
景
好水

人そいふふははるは花威
野はらとももん花のむす
はるは花のいそぬとあは
右 利政
右 貞則
右 貞利

桐花

かうさうも沖きるが桐の
あふ人桐をやりとら
家の目貫とく秘録
けらとみく
紀行
一巻

目貫ぬも花の咲ちう梧桐右 貞利
舟戸の水々あけさうや桐の那 重長
窓のわかれ花を丸鴉の枝の塔 友介

粟花

十里藪まきみよけり此花の
風のやあなくさしくけり此花
花のれく美お似ぬ粟花きつと也
花みきハ花つくりとすらもさ成
今柄 法信

八重垣よ一のつん物やうりの名遣 トム

松栢花

美奈ぬさきとみさうや栢極む
ちや火燭書戸のあは花松栢
木もくしてめさきやまむ松栢
とめえとぬせけさうや栢極
辛 重吉

梅

梅漬ハ鳥飲のさうや外

枝るうら梅漬やつかの内
 南枝うらうらひびくこじ糸
 青梅の白ひの玉れすうり糸
 すうり此梅や水燈のなす糸
 うら木れ実あまのしら梅漬
 一糸のすり糸るれや梅漬
 借りきとるうらや新瑞の梅漬
 花と実やならこひくの梅暦

岸 未得
岸 正凍
岸 宜和
岸 昌為
岸 如貞

梅のぬきんすうら木やし
 枝乃花やかきわりや
 杏子や

右 金成
右 後重

饗うら味いんちれあん

楊梅実

中れすうらは枝のや
 枇杷實

おしうらうらうらうら
左 正紫

おみまのいりさるおすん
ちりりい十つ十やうに救
桃の實はだうめんんあま母

早苗

さし女と田弁おれお種
勝をれをくら田おれす
あおてる人こころら田
こころのちんと目お種

利政

万民の種く飢ぬい子苗
種酒色の女もうへ人あつ子苗
縮ちてま重とみる早苗
妙もせとまらに種たり
こころよもち人の種田
人ちの命れをいへ田
あつちをうに種田
不可思儀あられそ

酒色 定保
有石 貞利
坂倉 政辰
大坂 全勝
江戸目取考 好永
鞍馬 元辰
あね

ふー田の法をきく事也
糸もちぬくつくり物餅の
やとぬくつくり早苗
お災ふ下ぬふとくつくり

麻

あのとくふくやすくつくり

帆付鳥帆
子大角を

垢帆のみとまうつくり
る紐

良方
玄純

こ こ 〃 此

垢帆まじり法のみちりつくり
帆も照目の寺とさうり
垢帆や上戸の具といや
暑めくつ帆とちりつくり
おえつくねにちりつくり
帆もくつ帆とちりつくり
おふ指や天祥のさね全
つくりつくり甲は

流る川よりとれ金銀の
 鴨もや茄子あまきなり
 恒々今もと休むわづら
 玄ありて十八や若の内き物
 ところ集の流やうへ玉
 わづらとほりやさきと鳥
 流るやうなりすれあも
 あふれしむまや午のま
 位田
 政伝

菊の討も終ぬまてくまのま
 常好付又終ぬまの鳥
 面や親と子とまの鳥
 思母されし目傍の金
 おもひや吉次といは建具
 名あかしくひやけもせ
 町らるき此價や
 事らるるたけの鳥
 寺田 舎金
 橋山 係取
 松本 順理
 平柄 良次
 江坂 忠行
 若谷 貞利
 林 利政
 李貞

六十五

志乃引若み出さぬやうり
石 貞子

羅生門の色え

ちんちんみう終ともした判の尻
月

竹垣の終終み似らぬ尻
良造

神志なりといふ尻と終

よしくたしくけさへ
系

ちんちんみう終はぬも神志の
友我

ちんちんみう終はぬも神志の
政次

目らぬると境や折こむ尻
池田 角

尻ぬく毛物ハ文字ハ物成
了善寺 冬義

尻賣てと終終さや麻の
岩村 武次

くさくさらしさや操尻
高田 元晴

くさくさしの生腔みし尻
林 冬宣

面鏡の終の舞はる尻
久友

おひくみちる尻や百へり
井上 由竹

尻のをりやえは尻さる尻
西知

娘所の産るる地産れおこ
桃山 保友
 烟の物もや娘所のよる此殿
石段 之周
岩村 女次
 娘所此殿らさうけまらん
中修 貞宣
 あくゆうかふるあさるや節甲
大坂 金成
 茶入あもろぬ茶子と撰味
道徳 了可
 茶の合は夏切めらる茶子
石段 女次
 一夜はるもやすこ海女思孫
岩 吉時
 くれめらふさうらやと節の神
石段

十八ちおさこらけのきり成
末 兼永
 風をいさおよ蟻牛比角さ
了可寺 了可
 氷やとむえらる物や沙糖乳
長祿 長祿
 二ちく代の烟のわらわら
同 同
 けあまひく人晴明の刺の乳
了可 了可
 かけまつらあまやるに賞さる
了可 了可
 乳の残もまらつるけ孫け
了可 了可
 後散判とる人まに
了可 了可

あふれひらりめらむとほしめ

董

いらふのこころ一月の影法師

尾形

桃山

家春

たらし家をまきふ地りちこふ

赤松

保友

の母まふいらふのほらもはる

定房

藤子

ふあの子や夏そそ雪とまのこ

矢女南り血の流るやお粉

お入母らぬく折もあこの
まかけくらくいとくはのこ
やき巻のりくは下巻花は
目がとらる擁竹やとのこ
一丈のちのつきけのあつこ
しと燈をまきえんはまの北
米れらも夏の秋篠のあつこ
周母清ひら出っけあつこ

林

粉川

藤

久保

忠益

結衣

長丸

惟子

惟子も実六月のさくら花
 汗も力あかき堆子あきし海
 さくらとさくらのはなをわかれ
 移の地も志けむわさるる暁
 糸にち物さるるしりや夏夜
 肌わびく社をのさくらあきし
 心さくらいさむけむ人のさくら

 良縁
 之統
 伝元

筑山集

夏部

夏夜付月

短歌へわくまをわめまらさ
 へまねいひとせら糸くわの
 大さな道通めぬつる月の
 坪のくらは月や雲の火くわ
 赤き糸や猿の尾籠をらつ月
 夏は月いさむらあひまてりあ

夕さらく清き月や花はん
 涼さのこもりや夏月
 夏の秋はまらちや月乃ち
 秋の月一寸法師夏は月
 空の海乃こもや夏は月の
 短秋母寐たる人や猫の影
 夕のまも秋をのみひ草花

庚申詩

弘
 弘
 弘

とらやわら尾を短秋やみえ
 やつまち川の朝日へ月秋鳥介
 夏乃秋の月は菊やちよの
 夏は夜乃月のくもりや螢は
 やの嶺乃月やうき波のたけり
 夏乃秋やま物の矢とり月の
 年は矢もきわそとら夏月
 夏の月は舟もやあまの

川
 保
 夜
 花
 夜
 尾
 有
 名
 川
 保
 夜
 花
 夜
 尾
 有
 名
 川
 保
 夜
 花
 夜
 尾
 有
 名

きつよやまの其うりやなつつき
月は志らりかは本は名やめく多く
夏の秋や志らく杖月の秋は脚は
左 伝元 春氣 車久

二司のせきめく

夏の秋や月を日となりの
夏の秋は秋月はあらひ十一秋は
夏は月はあらくハ二十志らりの
月新乃始や夏は秋の秋はり
山松葉 時之 清之 時之 左歳

冬虫とめきえ 夏野も森引

蟬

夢

夏の部は秋やえよは秋は秋
の秋せんはせんの秋は秋
地新とわららるは秋は秋
山寺ふるはるは秋は秋
常々脚めはせの秋
木の枝ははせの秋は秋

何れもその衣をさへせよの理
 風うらむ指の癖やまゝの衣
 衣をさへ替ふむいませに法師
 癖いまる秋母を清くせよの衣
 衣をさへ替ふむいませに法師
 衣の癖のまゝの衣も何れも
 衣をさへ替ふむいませに法師
 衣をさへ替ふむいませに法師
 衣をさへ替ふむいませに法師
 衣をさへ替ふむいませに法師

大旱せよの衣もさへ替ふ
 衣をさへ替ふむいませに法師
 衣をさへ替ふむいませに法師
 衣をさへ替ふむいませに法師
 衣をさへ替ふむいませに法師
 衣をさへ替ふむいませに法師
 衣をさへ替ふむいませに法師
 衣をさへ替ふむいませに法師
 衣をさへ替ふむいませに法師
 衣をさへ替ふむいませに法師

六五

晴天の毎う枯木に蝉の聲
天志の所地志の所蝉の時毎
帰蝉の去るの如く夏三郡

荻原

自利

自島

友之

下加ふる所あり

ときゆよくたはて啼や蝉の聲

好山

助清

蝉の聲おきやせや森の所

了安寺

文翁

一夏蝉の報恩の如く秋也

同

蝉の去る如く人々蝉の如く

三由

蝉衣移とせぬ雙の玉より
蝉やし女好ありものう三保の

中村

好相

菰

吉松

江川舟あり

帆の如く蝉と暮くらけ船

赤松

逢坂より

冬風の弱乃吹の世の聲

長松

長秋の如くやまの蝉乃如く

蝉の如く下りてや耳に元は

一

孫^ハ也月とひら^ハとせ^ハの
 かま^ハと鳥^ハ用^ハの^ハの^ハ
 を^ハの^ハの^ハの^ハの^ハの^ハ
 虫^ハ乃^ハ中^ハて^ハの^ハけ^ハの^ハの^ハ
 山の^ハ神^ハ乃^ハん^ハれ^ハ病^ハの^ハせ^ハの^ハ
 つま^ハそ^ハわ^ハら^ハつ^ハく^ハ蜂^ハや^ハの^ハ
 蜂^ハと^ハ初^ハま^ハれ^ハ鳥^ハ窠^ハ神^ハ脚^ハ
 蜂^ハの^ハ命^ハは^ハら^ハひ^ハく^ハま^ハや^ハ落^ハの^ハ玉

夏余庚

蜂^ハ此^ハの^ハや^ハあ^ハく^ハの^ハい^ハち^ハひ^ハを^ハ神^ハり
 さ^ハと^ハら^ハく^ハあ^ハま^ハや^ハと^ハり^ハを^ハ神^ハり
 や^ハの^ハ神^ハと^ハひ^ハつ^ハく^ハの^ハり^ハを^ハ神^ハり
 と^ハし^ハ見^ハや^ハ神^ハを^ハ青^ハ葉^ハ神^ハり
 な^ハれ^ハは^ハま^ハり^ハや^ハを^ハ神^ハり
 新^ハ教^ハを^ハ神^ハり
 水^ハ室^ハ

平柳 良次
 印伝 右政
 石坂 会成
 森 勝之
 山名

六月朔日金丸

水鏡考云人志のくさあをりや
水鏡考云人志のくさあをりや
水鏡考云人志のくさあをりや

伊

儿

祇園會

弓持ハ八まん山の勢を固くか
祇園を二幅一射系津場
祇園を二幅一射系津場
祇園を二幅一射系津場

ひの穴のひしすも祇園
月降の出は穴ありひしす
祇園を二幅一射系津場
祇園を二幅一射系津場
祇園を二幅一射系津場
人の子と長刀降かけし
中はひしすも祇園あり
と次沙代やちねん人降

舟志ふむきあつ山の祇園平尾 幸心
 わりやけらみさひ祇園の舎平 一升
 山の神とそやうさ祇園夜 貞宣
 祇園舎めひく山城のまう能弁信三 一明
 ねまちりし山中 森 油利
 多んちりの群や祇園のま中 金貞
 祇園をふれをかきわん中 永長

群の思やうきりそん祇園平柄 良次
 月群のおちけう素 常配
 山方素 時之
 月夜あやうはと月群祇園中 左宣
 ちうさやあやうはと月群中 長次
 大鼓いん子いちゃん素 常治
 菊群いひけ道徳信 宅房
 役の行志六十九 やあき渡り物 政伝

祇園寺の観音のや清水寺 中 自堂
 祇園寺は赤山かたれありか 月
 引まの長力辨や水車 七
 五まえすくもたや、おん珠 月
 月辨とゆもや清き扇の産 月
 意をりや菊も辨乃の心と打 月
 合すもや鶴辨のこゝろ太鼓 月
 辨そそと祇園精舎のこゝろ 月

白雨

夕さらけ赤きやう赤き蛇の糸
 夕たちのまやうりそとね期外
 鳴神ハ夕立あつたを教へか
 夕花や目のまやうりそと縮光
 夕立ハまや流すりそと目てり
 伊ろらハ夕花をおひまか
 夕さらけはまやの目入目糸

久らららら天國のまじり
夕多地をうまん長た刀のまじり
お出よふれ夕多おま国利
夕立やふりてあらに雲雨ら
ゆふ地の回光ちり一程の
夕ららら家るれや破ま
夕立のまのまのまのまのまの
雷乃着る力の毛もららら

ゆふまわわくぬ給あつさの
白面や只一ありのま乃
夕立のまのまのまのまの
ゆふまわわくぬ給あつさの
白面のまのまのまのまの
夕立のまのまのまのまの
せんまんの夕立のまのまの
夕立をふり地らや箱根山

六十一

月歌みちる夕互い歌うら成
みちる夕互い夕互いの陽
夕互いの目利のやをさるる成
ゆふと地やふる村や此銀の先
聖の足夕互いやまは
夕互ら此月の物のみ見ゆ
夕互をともさぬ藪のきよみ
夕互此みされやきとら重れ

けのい玄旨法平のつ能

とまきり

おひりりふる夕互ら二切
夕互い極をのき極をゆゆ
ゆふ互いなるはふるまふ
夕互らと猿いこむるあのみ
ゆふ互い元さきりられや雲
疑切とゆふら此川若流

心 友 利 政 無 凡 会 聖 貞 利

かまや河ま

夕まらみ世と朽まや河乃水
ゆまに地ちりて暑まや朽の氷
解まの夕まらふつもまのこ山
夕ま地や鬼のうら川跡生門
わまらつゆまらまや秘書
夕まのゆまらぬまらまらまらま
ゆまらみひらまらまらまらま

伊敷 正賢
備 松島
備 政信
高 長
森 家清
勝之
あ部

ゆまらま新端や朽跡のなかり
夕まとらりあつるま月乃雷
わまらまゆまらまらまらまらまらま
又まらま月やゆまらまらまらまらま
向まら目てられまらまの徳まら圓
まのせまらまらまらまらまらまらま
山乃腰まらまら夕まらまらまらまらま
夕まらまらまらまらまらまらまらま

信田 政信
中田 利久
世山 酒乃
草林
長野
備 政信
備 松島
高 長
森 家清
勝之
あ部

六 十三
夕暮の涼るき山嶺や磁石山
田ぬいりきけらやうぬ雨知りけ

暑氣

暑き日ぬきくくはらわはるき
暑き目のくかりいふのや
ぬいよはれちやう一帯と夕烟
暑きやとよしのあれちの中
暑しい日のけ吹くくやきと草
奥の 女三

俯ゆると暑き日笠や油照
指とく流もるまや照目のあつさ
お中本もるあつさむるまやま
九夏さんかく風まらぬ暑き
六月の夏のおりたあつさか
かそけりや暑きを拂ふる常
暑きと秋の星のあをかりの糸
三書きぬあんたけちる暑き
高 富 中村 葉 庫 貞 長 飛

目もく水の涯友の目ふあひ地物
ひえの山へのやうごとりと

人修りまわら

火燭やとれほるも暑き初坂
いそぎあつし影を足地力の雪

解付園

山風と腰みくしうあふき
吹風やあつし女の紐あき

霧の埃をかくもりさの舞解
あつきとちうふ志地乃解
大水巾細き人あふきあつ
吹風とくを解さうの唐園
涼きは價も文金にあふき
折時みくしうあふき拍子外
接あふきもすの涼き解
徳人のあふく存や風乃解

風と樹と溜よ并く扇は
暑き日とあふや汗をかく
風をよとふ外なるぬらひ
斜るくして扇のあふ
地とくそ扇や風乃かられ里
ゆひの軸戸も扇や風車
日月とよふと揺らやまの扇
おをゆく夏も城敷の扇は

魚とく風とひりせ扇は
風よりや涼さるる志さるる
風の神乃おらひひあまの扇
扇とゆららふ致つて玉堂
夏の扇風とくえ開くあふ
暑き日の若患やふ修羅
扇あかぬ扇風もあふはち
はらうる扇や夏の二季あり

赤下は月を海路の國
 何方とあふふけの折句
 外風の中さらあふふの地
 あふふの風うちあふふの
 礼儀とあふふの扇
 ちりぬの風やあふふの扇
 風乃扇やあふふの此海路
 解おもけりの力や海路

流らぬとあふふの扇
 扇切はて風乃折句
 涼風とあふふの扇
 風の流あふふの扇
 ちりぬの風やあふふの扇
 ちりぬの風やあふふの扇
 ちりぬの風やあふふの扇
 ちりぬの風やあふふの扇

一井 重紀 重伝 取若 宗祥

風のまはれゆいつあふきの骨の
風もさうくひくを法のと成
我々のくくくまひくを、
暑き日いつんやうに、
すかきもやさんちうはう、
涼風のくくくやまやうに、
解相撲とけいひひのもこ、
暑き日やうくく同く解

一頁
梅新
宗時
林彦
右左
自利
心泰
真久

解かふと家の風を御新
比豆比豆尻力ひめあふま、
松解かきさうすあきまの、
解かあ較へんせんれすう、
あふまきさう清涼度う大うらわ、
吹風みわの身とるまも大う、
田舎てもあふくい来りあう、
るくくくあふまの二

友三
心武
心久
宗春
織継
心廣
心勇
心可

源さくく極某のころりよ外
 風の吹をやせんまりぬちり
 みのさくくきつ建網代のら
 吹風とまれやあふを組團
 夏れ目のあひらやまらる
 常乃目母をぬり風の解網
 風の神の物ひくうあふき網
 河ののあさるま流久解網

保友 彦威 貞宣 貞利 孝貞 貞宣 政信 正知

金銀をやくつくふいありは

長銀丸

日結上人とある貞宣
 のま結く苗産

あきん比ひるあまは解外
 風のさくくつすまの解外
 ころり風を解をすくあ解外
 源さくく未廣ありはあ解外
 ころりあく風をりらあ解外

三六

ふらぬ解の骨や親世の
骨をいほよきいあきお撲
るふのそしつらひ或る法の解
下地をすくあふも風の
夏の秋八月やあましくも
月乃解流ふや夏の神ま
り

納涼

す風の香や空あめ解の嶺

はら先いさげくむわが
舟の帆や是もすき草
風乃あまひつせありのな夕涼
す風あめ川をわらふたむ
夏へ流るくはを志しつるも風流
六月や涼を風の神五月
くはの宿も
涼もや一樹のまゝん気葉

奥の
な三

中
杉森
むら
むら
西長

深ちと流ゆい美人や小生坊位 長次

くハ深しきつるをあらて葛原 長政

深所の松ハ長柄乃日笠草 長隆

折波や深きを思ふしをた教 長龍

いさあ松深しき聲や流しを 〃

深涼し物さよ水の舞都 〃

高きむちあく 〃

深さの用山あきや山頂の松 〃

死法寺あり

美ありと深き道よ死法寺

泉付法あり

けと河ハあれえまのりか

累きをたたくかを法あり

深さや河内りまの國さい

くめはいさくあさの井の法信田 政信

乃のく清水やじまふ柳柳 宗宗

ひまふみや深水のやとつる水 あそ 貞利

まほりくといはまやむとふのかや 本 一色

那もやんい流もさうす坪の内 信田 政伝

日きほかの汗はもつとむ泉 奥 なこ

岩の縁み金生水の泉 長 長頭托

まんすりと踏入つちのや こ

水と夏むすふ目にはらさ こ

蓮

水茎といふもや池の蓮記象

鼻のあかき程のあそり あ

花のなをうく海はれし あ

あ逢くまやせん蓮花の あ

舟米のひくもらふの あ

生花のいんみさう あ

奥踏ち傘鋒とらる荷 あ

おらまを又花の あ

さくらんぼくしほをひく蓮花
 乃るふ目の仲を在する蓮花
 水の中み候やると妙法蓮華
 あれせらるも及びみ此あるの
 孫治の形乃罕そらす也
 華は糸は弘誓の舟帆纏成
 深こもとけ出る九品の蓮花
 九川の志をむちしやとすの意

系 拵
成 成
九 九
好 好

白蓮のひくや面落は
 卷奥さん やらすの意
 草木もや成仏ある蓮花
 佛壇みさしやらすの之を
 堂のうらた秘意も法のもの
 池乃るは文珠や能する草花
 父の追う者あり弟す
 牧去もくくや水の蓮花

信 信
上 上
奥 奥
西 西
意 意
蓮 蓮
花 花
堂 堂
法 法
の の
物 物
草 草
花 花
弟 弟
す す
蓮 蓮
花 花

六二四

おのゝ象くまきあへ花の蓮中記
 水鏡俄鬼燈りまひけ蓮戸記
 花の敷も四百餘ありあちの信蓮
 志あるも守能さんぬ末や若光岩蓮
 病ももこひぬやまき葉の鉢蓮木蓮
 西にそれゆえさけし登蓮魚蓮
 夕さらけあさるもあもらり水善蓮
 こころけくみるの頭のもらり水善蓮

花とすまきかじらいらつる蓮位花
 葉とる人ひくいむく蓮八花
 花は任輔の蓮の仔をうり夫蓮
 いとゆきまらか蓮の花はえん年蓮
 花母あつる水あや流つ蓮庫蓮
 芥ことあんころまやうれ白善蓮
 車輪も味八葉の蓮長蓮
 いまかろう蓮花母のり日蓮

六十五

蓮の葉も花の志比し満浦

お傳やまあまうち母あん

蓮乃花やんるふ君こそま

花の中はまん入子れとら

御扱付夏津果

一ちりやふ皆月の志つら

ゆき洗やんふゆわみき

御さや園子とらふみ

夏良

こ こ こ こ

見しつらみま

こやすせほみ園子れ

ほ若やまら移りもの松乃勝

皆人の送ひあそむや

戀んやあそみ月の方

夏津のかきりち御扱川

城の涼き勢や夏津果

波いた鼓夏はらふ

夏 乃勝

夏 乃勝

こ こ こ

夏うらう波のそりえや舞つて

雜夏

さあさああけき松山あいの夜

風あつちの夜や丁子燦

死らりーおとんのあ

とく舞つて

大死はさせー夏はゆる

青されよき結とちる麦

夏の水まじまじつる井に

物投の涼さみらむや一秋酒

末の露もよの湿気や早松

夏もくいつひう雪うけ山

そよまよ

あささく夏うらや地とうき

あささくいつちも夜よ一盛

花やんるひらう三年二満

右 吉野 川 壺後 日 皇沢

一夏花法むらみしり

りける

夏花うらの末摘花の志

本村

長

一夏垢離のらひてみ湯敷

沼

蓮

夏河の渚中みかふいもあ

北口

心儀

優曇花と見えりふ

森

心

夏夜いかにあそく

中島

秋

り藍のしを敷あふ島

中島

貞宣

後林翁妹

とくひいあさるいゆり子

田

日

客のある庭や風うら十燈

中村

竜勝

風乃林や夏へ海風みから

中村

舎茂

雲花やもよひを磨け

中島

命

結とらてはくふも力香薫

清水

貞宣

くふひやもあそく

佐賀

清成

たのちかひせり

本

貞長

子付てもあせぬ

本

貞利

三

夏はむら 孫汁の菜み久の飯
とわを夏の秋の夜を一夜
竹の舟のまはにちりあや一はげ
白流りやうりまのり一飯酒
さう物の約や十八ち南河
湯の山やなれ地獄をすまわ
なりのものもをまじりくまじり
水を舟の河のちりまわあす
田 吉云
岸 林林
塔 正教
菜乳
あ竹
坂 威補
五 元伝
流 吹白

時らぬふいふまをい川の雪
夏はまのらまらやあまりの雪
なりの人あなつら小雪次
夏の男のあふんこむまの雪
夏物の幕はひくあまりの雪
雪花乃とこちりまれの雪
宵啼は鳥のふ月乃より此雪
夏清く湖とちりまれの雪
中 貞空
岸 康身
坂 武次
加 白
松 一治
山 実負
荒 芳昌
本 方成

海

夏よりいへるひる雪子の獄

其之

花みかづら根のふやむり

長頭丸

鯉とほらんあつ泣野の麦

白田

河ひまあましく破うち

腋袋

夏よりいへるすまひ

二階水

名もふ何處も王が氏也
昭和十一年四月字了



